

メディアや学界による暗黙の唯物論教育が、諸々の犯罪の背後にある

Greatchain

2019/07/28

「生命への畏敬の念」という言葉は誰でも知っている。それを助長しなければならないことも、誰でも知っている。しかし、それを軽視する方向へもっていこうとするのが、メディアや学界による暗黙の唯物論教育である。なぜそんなことをするか？ それは科学の「威光」の前にひれ伏しているからであろう。では、それはどんな科学か？ それは唯物論科学という、今、盛んに批判を浴びるようになった科学である。科学という堅固な現実の基礎があつて、その上に宗教や哲学などという、ふわふわした頼りないものが浮かんでいる——人々は一般にそのように考えてきた。そんなものでないことが、学問的にも次第に確認できるようになった。

このような科学者は、生命は人工的に作れるはずだと考えている。この世界にはモノと物力しかないという唯物論信仰に基づくなら、そう考えざるをえないだろう。そう考えてみるのが間違いだというのではない。しかし、百年以上経っても成功しないことを、自分の前提そのものには何の問題もないと考えるのは、真理を求める科学者のやることとは思えない。

先日の記事「傲慢は自滅し謙虚が道を開く：恥ずべき科学者共同体」で言及した、戦闘的な化学者 James Tour について、Evolution News のクリングホファーは言っている：——

ジェイムズ・トゥーア教授が、ますます頻繁に彼らを批判するようになったので、生命発生科学者たちは気の毒なことになっている。ライス大学のこの著名な合成有機化学者は、スピーチを行い、論文を発表し、「科学の反乱」シリーズに出演して、生命発生実験が失敗であることを、繰り返し宣伝している。生命発生の神秘については、これらの科学者も認めるかもしれない。しかし彼らに典型的なことは、その後で、今彼らは、それを解決する過程にあるのだと言うことだ——決してそんなことはないのに。

彼らはめったに、トゥーアの言う「彼らの直面している深遠のような不連続」を、認めようとしなない。

ところで今彼は、雑誌 *Inference* で、一步前進して、生命作成科学者たちに、「ちょっと時間を取る」ことを提案している。それは幼い子どもたちの両親が、よくやることだ。何年もかけて、興奮して誤導してきたメディアが、科学者の言葉を引いて、しかし時には同じ科学者から矛盾したことを言われながら、説明してきた後で、トゥーア教授は、今、新しいアプローチがあってしかるべきだと考えている。今は「一步脇へ退くか、自分の部屋で一服するかして、すぐにそこへ戻ってまた同じことを始める前に、冷却期間を置くべき」ときだ、ということである。

この専門家の言葉から、学界とメディアの癒着と、彼らのあせりようが、よくわかるではないか。もちろん両当事者の背後にあるのは、「何としてでもダーウィンを押し通し、神を殺せ」と言っている、世界の支配者である。彼らは必死であるから、今後どこかの時点で、大芝居を打ち、ついに無生物から生物が合成されたという大ニュースを、世界的に発表するというシナリオは十分考えられる。ジェイムズ・トゥーアのような良心的な学者は少ないだけでなく、メディアの力で、策謀を用いて押しつぶすことは簡単だ。そして、彼らに協力する、頭はよいが、良心をもたない学者はいくらでもいる。これはいろんな事実から推測できる。——万—そうになったら、どうなるか？

ふらふらして自信のなかった人間解釈が、ついに科学的に公的に決定される。「生命への畏敬」とか「人間の尊厳」といったタワゴトが、嘘だったことが判明する。それは宗教家の陰謀だった。やはり人間は、ちょっと賢いだけの下等動物にすぎず、そのような扱いをすべきものなのだ。唯物論は正しかった——。こうなったとき、人間の社会には、善悪も、犯罪という概念も感覚もなくなる。人間は何をやっても許される。ただ知能だけがものを言う。

こういう社会から、どういう人間が生み出されるだろうか？ ひとつ参考になるのは、折よく、最新の記事「バー米法務長官が連邦による死刑を復活・・・」に紹介されている、5人の死刑囚の簡単な経歴である。これをもう一度見ていただきたい。この5人に共通するのは、単に人を殺したことでなく、「人を人とも思わない」ことである。人を殺すだけなら、それほど問題ではない。喧嘩で激昂して殺す場合もあれば、殺して恨みを晴らす場合もある。しかし、この5人はそれには該当しない。些細な自分の都合以外には殺す理由をもたず、人のいのちに対する恐れというものを、露ほども持っていない。この者たちの問題は、殺したことより、殺した後の遺体に対する、極端な不敬な扱いである。唯物論者は、人間の死体をただの物体としか見ないことに注意せよ。

彼らはどう見ても、十分な教育を受けた者とは思えず、知能が低いのだからしょうがない、と言うのは間違っている。これは知能の問題ではない。彼らは教育を受けていないのではなく、

道徳を無視する唯物論教育しか受けなかったのだ、と言うべきである。そしてその教育は、人が特に言って聞かせる教育でなく、環境の中での自然な教育と考えるべきである。生きた人間にも、死んだ人間にも、全く敬意を示さないという歪んだ態度は、社会に浸透した、しかし無意識の、唯物論・無神論から来るものとしか考えられない。

そしておそらく考えられることは、彼らの中に比較的知識人と思われる者がいて、何かの折にダーウィン思想を口走り、それが彼らに強い影響を与えたことである。「人間のいのちなんてものは、もとは物質だよ」「無駄に生きている奴は殺せばよい、強い者が生き残るのだ」等々。そして彼らの共同体では、冒涇的な、いわゆる罰当たりな言動や、下卑た言動が、日常的に交わされていたと考えられる。当然、長幼の序などというものもなく、子供が大人に向かって「バカ言ってんじゃねーよ」などと、平気で言っていたと思われる。